サリエーリの悩み・春一番

八組　上田謙二

サリエーリの悩み

昔、『アマデウス』という映画を観た。当時私はよい映画がかかった時は、できるだけ映画館に足を運ぶようにしてはいたのだが、久しぶりに観た映画だった。繰り返し三度ほど観たので、今でも鮮明に記憶に残っている。前評判が高かったし、予備知識もあった。モーツアルト好きの私は彼の音楽がボリューム豊かな劇場で聴けるのが楽しみだった。事実音楽は冒頭の『交響曲第二十五番』に始まって、最後の『ピアノ協奏曲第二十番』に至るまで、すばらしいものだった。映画もよかった。それだけで十分なのだが、サリエーリの立場というか悩みには身につまされるものがあった。その悲哀はよく分かった。

サリエーリがモーツアルトを毒殺したという説には、私も他の識者とともに大いに疑念を抱く。しかし、モーツアルトが毒殺されたという噂は彼の死の直後から広まったというのだからその根の深さが分かる。
要はヴォルフガングが人間離れしているほどの天才だったことに起因しているのだろう。
サリエーリは、モーツアルトの目くるめくような天才と音楽の高みに金しばりになった。そこから毒殺したくなるほどの憎悪と嫉妬とそれと正反対の敬愛の念にさいなまれた。アマデウスの音楽の真の理解者として数少ないコンタンポラン(同時代人)だった。難解ではないにせよ映画のシーンで、歌劇の『ドン・ジョバンニ』を観る者の内でサリエーリをただ一人の理解者として描いているのもうなずけるのである。
音楽の才とは別に世俗的な立場では、サリエーリの方がずっと恵まれていた。経済的にもだ。同じ有名人だが宮廷音楽家として生きたサリエーリと、自由人として生きたモーツアルトの相違にもよる。
だが時間は苛酷だ。ある意味では公平だ。現在の私たちはモーツアルトと彼の音楽を愛してやまない。モーツアルティアンと呼ばれるような熱烈な崇拝者もいる。それに比べてサリエーリの音楽を聴いた者などほとんどいない。彼が心血を注いだものであってもだ。それがサリエーリの悩みだった。
歴史とはそういうものだろう。一人のモーツアルトを生みだすため、百人、千人のサリエーリが存在する。産大な無名者の堆積が人間の歴史だ、と考えざるを得ない。

春一番

今年の春一番はいつ吹いたのだろう。気象庁より出される春一番が吹いたという情報に接した記憶がない。

日本海の低気圧に向けて、南の太平洋から吹きつけるこの風は確実に春の到来を告げる。木々は芽ぶき、各地で雪解けが始まる。ここ小田原城址公園の梅もそろそ満開である。春を待ち焦がれている人たちにはうれしい知らせだ。

春一番は風によっては台風なみである。きかん気で、わがままで、時には人をこまらせるほどのエネルギーを持っている。それはあたかも青春のごとく向こう見ずな力を連想させる。

私はもはやそういう若さを失ってしまつた老人だ。毎年、春一番が吹くたびにふと遠い青春の時代に思いをはせる。

私も春一番のように力に満ち、希望に満ちていた年月があった。己を過信していた時代もあった。しかし、それは苛酷な現実の前に脆くも崩れ去った。多くの若者はそうした挫折を味わいながら大人になっていくのであろう。

年をとってからはたとえ春一番のような向こう見ずの力はなくなっても、静かに内に秘めた力を維持することができる。その情熱だけはいくつになっても失いたくない。私は衰えた体を引きずりながら、ともすれば沈みがちになり萎えていく心を自分自身を厳しく見つめ直すことによって奮い立たせる。生きている間は生きた精神を持とう、と――。春一番は、そんな思いを私に授ける一年の節目の風である。

（完）